

2022年9月11日 「愛がなければ」 高橋克樹牧師

聖書 ホセア書11章1〜9節、Iコリント12章27〜13章13節

口に筆をくわえて絵を描く有名な画家で詩人の星野富広氏が次のような詩を作っています。「いのちが一番大切だと思っていたころ 生きるのが苦しかった いのちより大切なものがあると知った日 生きているのが嬉しかった」

私たち人間は、普段いのちが一番大切だと思っています。いのちを維持するためにはどんなにお金を使ってもいいと考える人は多い。けれども、このような人は「いのちよりも大切なもの」としてのスピリチュアリティ（精神性）の存在に気づいていないのではないかと思われることがあります。このスピリチュアリティとは「私は生かされている」という感覚をもとにした「肯定的な実存感」のことだとも言えます。人間が生きているといってもただ呼吸をし、心臓が動いていても、その人自身に「生かされている」という感覚がなければ、人間は真に生きているとはいえないのではないのでしょうか。いのちよりも大切なものは人間存在そのものなのです。なぜならば、人間存在はいのちに優先してあるものだからです。

人間は人生の行程において何度か存在の危機に直面します。青年期であれば親から独立して就労するときなどは新しい生活環境に適応しなくてはならず誰もが緊張の中で社会人になります。あるいは結婚して新しい家庭を築く時も、それまで自分が育った家庭とは違った家庭を新たに築いていくためにゼロから家庭を築いていかなければならず、存在の危機に直面します。いずれも、新しい人間関係の中で生きていくために、それまでの生まれながらの親との人間関係とは違って、自分でゼロから築いていかなければなりません。ですから、新しい人間関係は存在の危機をもたらします。さらに、中高年になると、失業や失職、転勤、配偶者との死別や離別などによって存在基盤がゆさぶられます。そして、このような存在の危機に直面すると、人間は自分の弱さや無力さに襲われて、肯定的な実存感を失いがちになってしまうのです。いのちの尊さやいのちの価値を考えると、この弱さや無力さをどのように克服するかが大切になってきます。

このような人間存在の危機に直面した人を理解していく上で、伝道者パウロはどのようなメッセージを私たちに送ってくれているのかを、彼の苦難と弱さに関する理解を通して考えてみたいと思います。

パウロは異邦人伝道の働きの中でさまざま苦難に出会ったことを生々しく証言しています。キリスト

教に改宗後はユダヤ教の律法学者たちからキリスト教の伝道者に寝返った人物として命を狙われ

つづけ、一方でキリスト教徒迫害の前歴によってキリスト教会内ではその使徒性が疑問視されていたので、彼はそれら双方からの批判に応えるために、使徒であることを人一倍証明する必要性を強く自覚していました（Iコリント9章1〜2節、同15章9〜11節など）。また、彼がユダヤ教からキリスト教の伝道者に転換したとき、それまでの経歴や社会的地位、人間関係などすべてを放棄したため、その喪失の経験を組み入れたかたちでキリスト者としてのアイデンティティを確立しなければなりませんでした。そのことが「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」（ガラテヤ書2章20節）、「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」（IIコリント5章17節）などの表現に現されています。律法を守ることによって自分の存在を立てていた古い自分から、キリストの十字架の贖いによる救いを根拠とする生き方へと転換した彼は、それまでの生き方が結局は自分自身の弱さを排除し、強さを求めるものであったことを痛切に悟ったのでした。自分にとっての苦難を避け、自分の障碍や弱さを切り捨てる生き方に挫折した彼は苦難や弱さをどのように理解するべきか、という実存的な問いの前に立たされたと思います。

また、パウロ自身は何らかの痛みを伴う肉体的な障碍を負っていたために、そのことでキリスト教会内の敵対者たちから誹謗・中傷と非難を受けていました。パウロは真正の書簡の中で66回というかなりの頻度で「からだ」（ソーマ）という語を用いています。このように体の喩えを用いることをみても（Iコリント12章12〜31節、ローマ書12章3〜8節など）、障碍を抱えた自分の身体のことを、ことのほか意識しながら生きていたのです。このようにみていくと、パウロが体験した苦難や彼自身の障碍や弱さが福音理解に強く影響を与えていることは確かで、この苦難の経験や肉体的な障碍こそがパウロの福音理解を形づくり、いわゆるパウロ神学を形成していったのです。

このようにパウロを理解する上でもっとも重要な視点の一つは、彼が自己の苦難や弱さを「語ること」によって伝道者としての自己像を構成している点です。通常、苦難や弱さは自分にとっては障害を感じさせたり違和感を抱かせるものですが、彼の場合は苦難と弱さの中にある自己を語ることによって、伝道者パウロという存在のパーソナリティをかたちづくっていたのです。自分の障碍や弱さ、苦難は理想的な自己にとっては受け入れがたいマイナスの事柄ですが、それを語ることによって現実の自分と理想的な自分との間で分裂してしまった自己の全体性を獲得していったのです。彼にとって喪失の出来事や苦難、自分

の障碍や弱さは人生と矛盾するものではなく、逆に自己を認識し形成していく上で必要不可欠な

要素になっていることを、救い主キリストとの関係で積極的に証言しています。通常の人生にとってマイナス評価を受けやすいこれら苦難や弱さの事柄が福音にとっては逆にプラスに作用し、自分自身のスピリチャリティ（精神性）を涵養させ、福音理解を豊かにするものだという認識がパウロにはあるのです。全く同じ出来事であっても、人はそれらを全く異なる仕方です。「体験」しているように、パウロは自分の体験した苦難や自分自身の障碍や弱さを「どう経験し、どう解釈するか」ということが福音理解にとっても、信仰者として生きていく上でも、とても大切な事柄であると言うことを福音宣教の活動を通して教えています。このような認識は一口に言って人間存在の弱さを尊重する立場といえるもので、その弱さを通して人は自分の限界を悟ることができ、それによって内的な反省が促され、神との関係性や信仰者としての自己認識の営みが深まっていったことをパウロ書簡は物語っています。

パウロ書簡を読んでいくと、教会の状況に応じて相互に矛盾する内容を語っていることにたびたび気づかされます。しかし、それは語りかけるパウロと聞き取る教会の信徒との関係性によって、語る内容がさまざまに変化し、しかも敵対者たちの多様な批判をも取り込んで語っているために、論理的で一貫性のある「神学的な原理」を欠いているのです。ゆるぎない確固たる主体があつて、そこから神学的な思想が生み出されていくのではなく、教会の信徒に向けて語る具体的な課題を解決するために思考して語っていくなかでパウロの思想が生まれてきたと考える方が実態に即していると思われれます。その姿勢は「弱い人に対しては、弱い人のようにになりました。弱い人を得るためです」（イコリント9章22節）とパウロ自身が言っているとおりで、そもそも苦難や弱さについてストーリー性をもって語ることは、自分自身で納得できるように自分の人生を筋立てることになります。

パウロは偉大な伝道者ですが、自己理解においては自分の強い側面を強調するよりは、自分の弱さや無力さをさらけ出す形で、キリストと自分との関係性を捉えていました。

たとえば、イコリント4章9節以下で「……わたしたちはキリストのために愚かな者になっているが、あなたがたはキリストを信じて賢い者になっています。わたしたちは弱いが、あなたがたは強い。……今の今までわたしたちは、飢え、渇き、着る物がなく、虐待され、身を寄せる所もなく、苦勞して自分の手で稼いでいます。侮辱されては祝福し、迫害されては耐え忍び、ののしられては優しい言葉を返していません。今に至るまで、わたしたちは世の屑、すべてのものの滓とされています」と語って、天恵づくりの仕

事をしながら、信徒たちからの援助を受けないで伝道活動をしている自分の日常の様子を語って

います。天幕づくりという仕事は前かがみで暗い仕事場で長時間座って作業を行うために目を悪くしやすい職業でした。また、皮なめしにかかわる仕事なので被差別的で奴隷が従事する仕事でした。パウロは肉体的な障碍を持ちながら、奴隷的な仕事に従事し、しかも眼疾(がんしつ)のために、手紙は口実筆記で弟子が代わりに書いていたものと考えられます(ガラテヤ6章11節、Iコリント16章21節参照)。彼はしばしば経済的な支援を受けていますが、それはこの仕事がかなりの欠乏(フィリピ4章21節)と貧窮(IIコリント6章10節)を覚悟することなしには行えなかったものでしたし、飢えと渇き(Iコリント4章11節)、寒さ(IIコリント11章27節)、裸(Iコリント4章11節)、疲れ(IIコリント6章5節)という苦難を覚悟しなければならなかったからです。この意味でパウロは自らの意思で苦難を受容していた人物であり伝道者であったといえるでしょう。また、皮なめしという職種が差別を受ける仕事であったこともパウロが敵対者から誹謗・中傷を受けやすかった原因になったと考えられます。

パウロは苦難の経験を語ることによって、苦難を解釈しています。通常は苦難に直面すると、人はその原因を突き止めてそれを排除することで苦難の現実を変えようとしませんが、パウロの場合は弱さの象徴である十字架の福音の視点から解釈し直して、それを自分自身の身にひきつけています。もともと人間は物を解釈する存在なので、自分自身の弱さを語る営みを通して十字架の福音の意味に気づいて行ったのです。けれども、パウロはその過程で一点、大切な事柄について語ります。Iコリント13章冒頭で、異言を語る能力があつたとしても、愛がなければ、騒がしいどら、やかましいシンバルにすぎないというので、預言する賜物やあらゆる知識に通じていようとも、愛がなければ、無に等しいし、全財産を貧しい人に施したとしても愛がなければ何の益もないと言うのです。この愛を信仰者自身が持ち合わせている愛だと誤解するならば、パウロの行っている福音を誤解することになります。しばしば、この個所は結婚式で読まれる聖書個所となりますが、人間の愛について語っているではありません。そうではなく、キリストが十字架上で現わされた贖いのことです。キリストの贖いの十字架のことを指しています。「愛」という個所を「キリストの贖いの十字架」に置き換えたらパウロの行っていることが明確に分かってきます。

神は苦難の中にあつても、常に私たちの同伴者として苦難と試練を身に受けてくださっているからです。

この神の愛がキリストの十字架に結実したのです。キリストの贖いの十字架を見上げて今週も歩んでいきましよう。